嶺深し橋より覗く夏つばめ

車は次の目的地である浄仙寺へと向った。前に二度ほど来ているが、いずれも八月の盆の頃であったので蟬時雨を耳にしたが、この日は森閑としているはずの「浄仙寺」には、なぜかピアノの音が森全体に響いていた。私達は全く不思議な光景に出合った。

見れば男女三十数人ぐらいがピアノを中心にして童謡を歌っていた。境内の池のほとりには今を盛りと花しょうぶが彩どりよく、咲き競っていた。

まずは本堂にあがる。文政七年（一八二四年）山崎是空（良海）により開山、二世の寂導は彫刻の才にすぐれ、寂導彫りを残している。四代紗空の時に、寺小屋「黒森学校」を運営、津軽一円より浮を志すものが多く学んだという。

明治四十年建立の本堂は昭和十九年に焼失。同四十一年に、再建したのである。この時に実家の亡父が職人として仕事をしに来ていたと母から聞いている。私は本堂を巡りながら、どの部分を亡父が手がけたのであろうかと、感懐もひとしおである。森に囲まれた静かな境内は泉水とあやめの名所で、森の中には郷土の生んだ文人の文学碑が数多くあり、今では「文学の森」と称される。

中でも私の一番好きなのは、鳴海要吉の歌である。

「いのちあって
　迷わぬものは
　　どこにある
　あれあのとおり
　　雲さえまよう」

秋田雨雀とは幼少の頃からの友人で、藤村の詩文を読んで、文学に傾倒するようになり、口語歌は生涯貫いたという。

以前に母と浄仙寺を訪ずれた時のことを、ふと思い出した。現住職の第八世行誉（平野義観）和尚とお奥様にもお目にかかり懐しい話など交わした。

お奥様は若い頃、山に篭ることを嫌い、一時ではあるが、私の実家のすぐ隣に住居を構えて、子供達と暮らしていた時も、あって母とは話が弾んでいた。そしてその時を詠んだ歌がある。

浄仙寺おもひ思ひに巡り来て
　老母と味はふ一服の濃茶

蟬しぐれあびて登れば歌碑の群
　苔生せおりし「雨雀、要吉」

職人の亡父手がしはどのあたり
　思いめぐらす夏の境内

次は「こけし館」へと向った。なんと入口で恩師とばったりと思いきや、今はここの館長をしていると云う「前黒石市教育長」辻村守男氏である。私が中学時代に教った先生で、その当時はまだ二十代でハンサム先生で有名で生徒に、人気があった。なんといっても「こけし」は盛秀太郎が描くこけしの瞳がいい、盛秀翁と私の亡父は血縁関係に当る、盛秀人形に会うと、亡父に会ったような気持になる、面ざしが似ているから。

おもざしが亡父に似ているこけし買う
　瞳を入れてだんだん母似になるこけし

こけし工人の実演を見ながら、今日のもっとも楽しみにしている、昼食をとる場所「ちとせ屋」である。

お酒でほろ酔い気分になった頃、再びバスに、帰りは温湯の「薬師寺」へ寄った。ここには亡父が眠っている。そして寺の庫裏の前を横ぎると実家の裏に通じる。

子供の頃は毎日のように近所の子供達の遊び場所であった。境内南側に大きな岩があり、崖になっている。その岩にしがみつくように「カエデ」の木が生えており、子供の頃はみんな、この木に登って遊んだものである。

この日は樹齢五百年ぐらいにもなるカエデを大切に守ることからか、あまり近くに寄られないようにロープが張っており、その枝ぶりは昔となんら変らない姿であった。

この寺にはとても悲しい出来事がおこった。二十年前であったろうか。住職が亡くなった時、奥様が後追い自殺をしたのである。檀徒の人達は深い悲しみを隠しきれなかった。

想いをまた深くした旅でございました。

百の秘話抱いて野仏雨ざらし

津軽弁　村の笑い話こ

「私の名前」

秋の収穫も終り、アンチョのツマが、出稼せぎに行くためG市の職業安定所へ説明を聞きに来た。

係員「旦那さんの名前は」
ツマ「雲雀野（ひばりの）アンチョです」
係員「奥さんの名前は」
ツマ「雲雀野ツマです」
係員「奥さんは、みんな妻ですけど、奥さんの名前です」
ツマ「シタハデ、ツマ、ダッテ」
係員「妻はわかりました、あんたの本当の名前聞いているんです」
ツマ「ワダシは、アンチョどこのツマダネ、ホガに、ナマへこ、ネエー」どんと机を叩いて席を立った。

（森　平）

平成十年度史跡めぐり研修

黒石地方の史跡散策

木村治利

平成十年度の史跡めぐり研修は、津軽平野の南東部、津軽の東根（ひがしね）（縄文時代の遺跡が分布している山麓に）の黒石地方である。

七月十二日午前八時半、会員十一名で役場前を出発した。

六月下旬以来じめじめした天気は七月に入っても一向あがらず、薄墨を流したような低く垂れこめた雲に覆われていた。

三三九号線を南進、藤崎で国道七号線を通り抜け、川部駅から田舎館村に入る。田舎館遺跡と総称される弥生時代の遺跡群の中でも、垂柳遺跡は水田跡の発見で稲作が実証され、脚光を浴びているところだ。浅瀬石川に沿って東進すると、神社、お寺、城跡が数多く見られた。

黒石地方は陸奥の国田舎郡黒石郷といわれ、鎌倉時代（一一九二）以前より拓けていた。昔蝦夷の住むところを「久慈須（くじす）」とか「国栖（くにす）」などと呼ばれていたアイヌ語がくろいしに転化して地名になったと云われている。

明暦二（一六五六）年、為信の孫、藩祖信英が弘前藩から五千石で分知し黒石藩となった。

中南野から中野川に沿って国道三九四号線を上って行くと、大川原に出る。

大川原の火流し

平家の落武者の集落という伝えがあり、火流しは約七五〇年前から豊作、疫病退散、村内安全を祈って行なわれる行事である、盆の八月十六日夜、カヤを束ねて三隻の舟をつくり、帆柱に火をつけて押し流すもので、神秘的で勇壮な雰囲気がある。

ここから、五粁程上ったところに城ヶ倉大橋があった。

城ヶ倉大橋

酸ヶ湯温泉の北西約六百米の所に城ヶ倉温泉があり、その西方に二・八粁の石英安山岩の柱状節理が美しい城ヶ倉渓谷がある。その城ヶ倉温泉と黒石沖揚平を結ぶ城ヶ倉大橋は、平成七年十月二十七日に開通している。

全長三六〇米、歩道を含めた道路幅は一一・五米で上路式アーチ橋としては、間隔（支間長）が二五五米で日本一の長さといわれる。城ヶ倉渓谷を眼下に見下ろす形の橋梁で八甲田の四季が満喫できる。

歩道を歩きながら、絶景を見下していると、ふと戦争当時の軍艦のことが脳裏を掠める。巨大な橋梁や建築物などを見ると、すぐ昔の軍艦の大きさを比較してみるくせである。

戦艦「武蔵」を思い出していた。

「武蔵」は薄命の美女といわれた。その艦容の美しさといい、装備の巨大さといい、史上だれもがなし得なかった建艦技術の卓抜さといい、世界のどの国の戦艦よりも壮大で、そして短命であった。

艦の全長二六三米、幅三九米、艦の上を六台のトラックが並んで走れるし、乗組員三千人が上甲板で一同に会し、映画でも見学できる広さと云われた。

昭和十三年三月二十九日、長崎造船所で起工、十七年八月五日、国民に秘密裏に建造なったのだ。海軍兵であれば、不沈艦といわれる世界最大の新鋭艦の乗組員になりたいのは夢でもあった。

しかし、十九年十月二十四日、敵機の攻撃を受け不沈艦は沈没した。排水量六万四千トン、乗組員総数二千九百五十九名のうち戦没者千三十九名であった。ちなみに「武蔵」建造費用は当時で六千万円といわれる。今では六百六十億円のお金が僅か二年で海の藻屑と消え失せ、千三十九名の尊い生命が失なわれた。

私は、戦争のむなしさを感じ亡き戦友の冥福を祈りつつ、バスにとび乗った。

黒森山と浄仙寺（浄土宗）

城ヶ倉大橋から三三九号線を下り、右折して二粁ほど山道を登る。

釣り鐘型の姿が特徴的な黒森山である。高さ六〇六米、その中腹に浄仙寺の山門があり、浄仙寺の背後に文学者の碑が並び「文学の森」として、落ち着いた、たたづまいを見せている。

昔から黒石市は、文学の盛んな土地柄である。黒石市出身で劇作家で児童文学者詩人の秋田雨雀、歌人の丹羽洋岳、鳴海要吉氏らの碑がある。黒石市には文学碑が九四基あるといわれ、このうち十三基が黒森山にある。

碑の中に秋田雨雀の歌碑が、とくに人気があるといわれる。

「ひとさして、わが手のひらに、おしあてて
　文字を教えし、父のなつかし」

目の不自由だった父が、幼い雨雀の手のひらに自分の指でなぞらい文字を教えている情景が目に浮かぶようで、訪れる人の胸を打ちます。

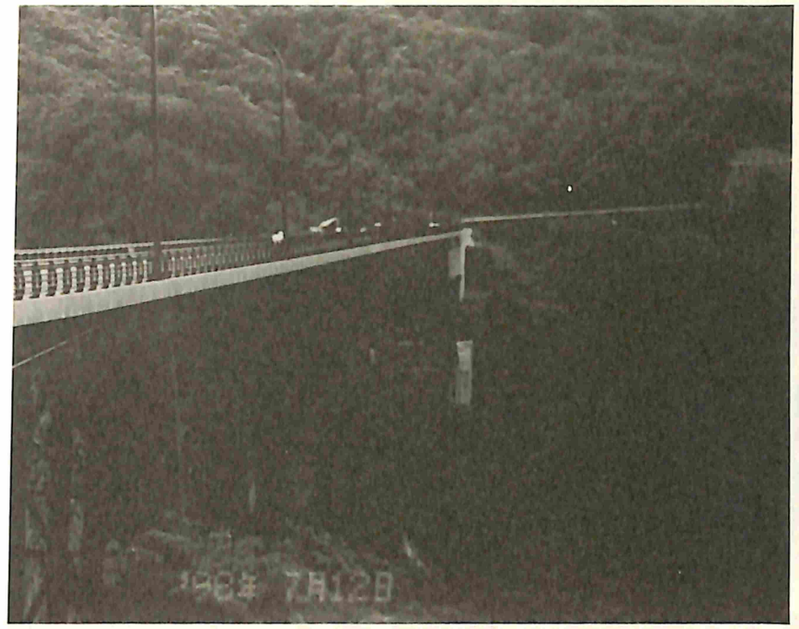
黒森山の森づくりは、青森県共産党創立者柴田久次郎（一九〇一～九二）たちが、浄仙寺の復興を手伝っていたとき、山肌にコケ蒸した大岩がごろごろあるのを見て「これだ」とひらめいたといわれます。「岩に碑文をはめ込めば、立派な歌碑になる」というのでした。

浄仙寺境内では、毎年菖蒲まつり等が催され、種々の会合や行事にと利用され、沢山の人出があると知らされている。

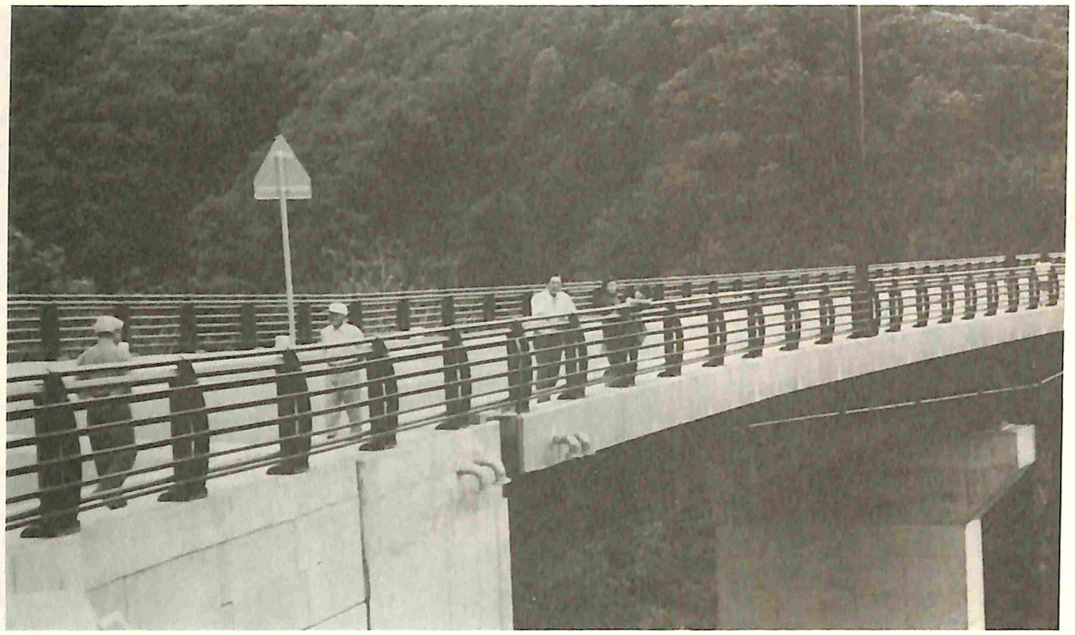
女性コーラスが、輪になって合唱していた。その美しい音色は山にこだまし、和かい雰囲気が境内いっぱいに拡がっていた。

二、三人の会員がこの勧誘を受け、合唱に加わり大声をあげていた。

寺伝によると、浄仙寺は、一八二四（文政七）年に黒石の来迎寺の弟子山崎是空が、廃庵になっていた浄仙庵を再建して現在地に移建したという。一九一三（大正三）年、習字や読書を指導する寺子屋も開かれ、「黒森学校」と呼ばれていた。二世



大　橋

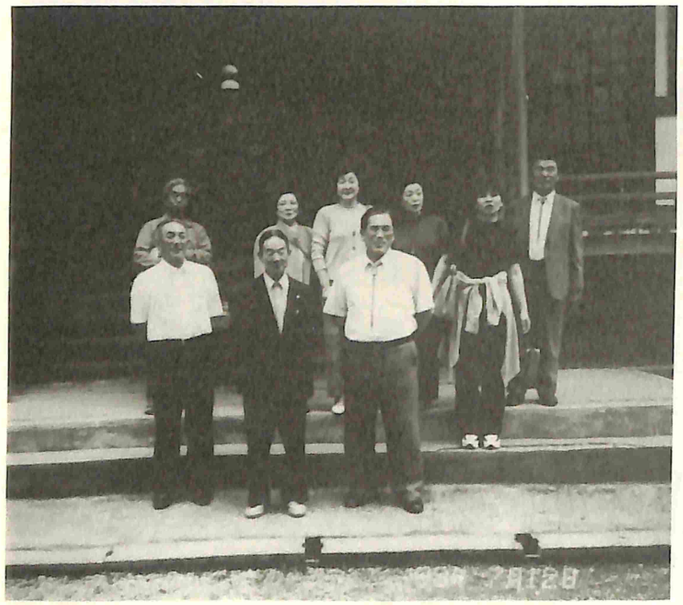


城　ヶ　倉

寂導（じゃくどう）は、一刀彫をよくし、「寂導彫」といわれる仏像が、津軽一円、秋田、北海道に残っている。一九四四（昭和十九）年、本堂が焼失し、一九六六（昭和四一）年、再建された。とあります。

津軽こけし館

幼い頃、誰しもがあこがれ、ほしかった、やさしさ伝わる、こけし人形が、三、〇〇〇点ほほえみかけている。



浄仙寺正面にて

境内のショウブ園

青森県内外から集められた「津軽系」「木地山系」「肘折系」「蔵王系」「土湯系」「南部系」「鳴子系」「山形系」「作並系」「遠刈田系」「弥治郎系」の全国十一系統のこけしが一同に公開されていた。

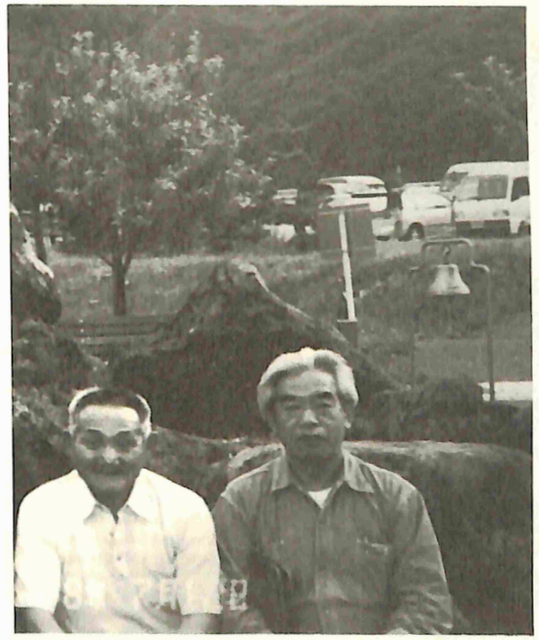
温湯こけしといえば、他の伝統こけしと趣きを異にし、アイヌ模様とダルマ繪を巧みに配した独特なものでアイヌ文化を感じさせるエキゾチックな風格があった。

今では、津軽系こけしといわれているが温湯温泉を中心として、津軽地方で発達してきた。大正初期、盛秀太郎が知人のすすめで作りだしたのが温湯こけしの始まりで、その後斉藤幸兵衛をはじめ数人の木地師によってつくられたといわれる。

幸兵衛のこけしは、幸兵衛型として現在でも受け継がれているが、温湯の盛秀太郎と大鰐の長谷川辰雄が中心的存在で、津軽系の伝統を創りあげてきたといわれます。

二階展示コーナーに盛秀太郎翁の工房が再現され、翁の生前を偲ぶ語らい場となっていた。

そのそばに、純金こけし（純銀こけし）が創生資金の一億円で制作され、直接手をふれることができた。少し冷たい感じがした。



加伊寿姫像前

浅瀬石川ダム

こけし館を経て、一〇二号線を二粁程東方へ進むと浅瀬石ダムが見えた。

六年の歳月をかけて昭和六十三年に完成した浅瀬石川ダムは、東北屈指の多目的ダムである。ダム添いに尚二粁進むと国道一〇二号線沿いに「虹の湖公園ふれあいの広場」があり、レストハウス、休憩所、バーベーキュー広場、スポーツ広場、石庭、野草園など多目的広場で、園内は沢山の人出で賑わっていた。

板留温泉

公園から一〇二号線逆戻りし板留温泉到着は、午後一時少し前だ。

宿から見渡す眺めもよく、山合いからは秀峰岩木山も望まれる。静かでゆったりした温泉地、道路沿いにある共同浴場は、朝夕の語らいの場となっている。

板留温泉の向かいには、浅石川をはさみ落合温泉があり、山すそに建ち並ぶひとかたまり温泉宿は、黒石の奥座敷となっている。

薬師寺

板留温泉から西方一粁、温湯温泉があった。

下温湯の浅瀬石川、河岸段丘上にある薬師寺（黄檗宗）の前

虹の湖公園ふれあい広場

に出る。一六二四（寛永元）年、入湯にきた花山院忠長が、霊夢によって薬師如来を安置したというが、寺伝では、一六八〇（延宝八）年、宗運の開基としている。境内に入って右側にある石敢当（魔よけ石）は、慈雲院（弘前市新寺町にあったが現在は廃寺）を一九〇六（明治三九）年合併するとき移されたものである。樹齢三〇〇年を超える石割カエデは、みごとである。

ここから東にすぐ、温湯温泉の共同浴場がある。天文年間（一五三三～五五）には熱後湯と記録されている出湯であった。

薬師寺の石割楓

共同浴場を中心に温泉客舎が周りを囲み、湯治場の雰囲気がある。泉質は石膏性苦味泉で、リウマチ、中風に効くといわれる。湯治客を相手につくられたこけしが、温湯系こけしといわれ、かわいらしさをもっている。このため「こけしの里」と呼ばれる。

又すぐ北にある遠光寺（日連宗）は、一六二四（寛永元）年の創立で、歌人丹羽洋岳にあてた石川啄木の書簡が残されているといわれる。

温湯温泉から紫明橋を渡ると袋部落がある、その富岡山を登ると、中腹に袋の観音と呼ばれる白山姫神社がある。津軽三十三観音第二七番札所で、その納経所が薬師寺となっている。そして、薬師寺は、法眠寺（二六番札所）と法縁の深い寺でもある。

黒石地方には、まだ沢山の史跡が残されている。心残りながら日程は終の帰途についた。「来年もう一度、黒石地方の史跡めぐり」を話し合いながら……。

史跡めぐり参加者

木村治利　高橋健一
白川章一　木下俊藏
山中長三郎　秋元惣之進
原田万治　櫛引八千代

木下加津恵　小山内トモ子
石戸谷恵子

薬師寺の忠魂碑前で

津軽弁　村の笑い話こ

「乾田に慈雨」

先日、村のあん摩師のところへ、六〇才になるH氏がやってきた。

「肩だば、バンバン固く張るども、下の方だばナメクジみたけねヤコクテ使いものにならねね、なんとが、上と下と逆にされねえもんだな」

「下の方、ムッタド六時半だば、夜間の仕事コできねでばし、ヒバ、一週間ばれきてみなが、三時半にしてけるね」

と、いうわけで一週間のマッサージを受けたH氏は、早速馴じみのスナック「マリ子」で実験したというのである。

同僚達は、興味津津、「どであったば」と、H氏のどこさ集まってきた。

「あの真面目なマリ子でも、三時半つかまへだけあ、猫さ　マタタビせェ。『さしぶりで乾田さ慈雨だ』って泣いだじゃ」

（真偽のほどは、不明）

（森　平）

文芸

詩

里の秋

小山内　トモ子

暑かった　夏が　別れを告げる頃
里に萩が咲きだして
夏が秋を連れて来る

いつしか夏は　忘れられ
田んぼは　黄金の波となり
トンボが泳いでる

ヒマワリも　色褪せて
夏の疲れが出たのか
西を　向いたまま

カラスも　トンビも赤く染まり
夕陽が　いそいでかくれる頃
虫達が　声を競いあう
短い秋に精一杯声はり上げて
里の秋は　ふけてゆく

短歌

そこそこの暮らし

櫛引　八千代

咲き群るる庭のコスモス揺れにゆれ
　戦ぎは吾れの心にも似つ

またひとつ何か失う想ひして
　日めくりめくる指の虚しき

子や孫と共に住ゐて十人の
　箸を並べる卓の賑やか

そこそこの暮らし支ふる菜園に
　翁手植えしトマト熟れ来る

おたがひに農の憂き日を歩み来て
　春立つ庭に夫と種選る

短歌

夕鶯

木下　加津恵

糖尿病の薬と叔母は日当りの
　スギナを摘みてわれに給ぶなり

血糖値に悸じて日頃は控ええし
　コーヒーを飲む罪のごとくに

子の如き医師凛として
　血糖値末だ下げ得ぬわれを叱りぬ

北向きの谷のなだりに白じろと
　桜かがよい夕鶯は鳴く

夫は独活われは筍取る
　谷間の春紅葉より鶯の声